

選果 A I で省力化

弘大など 糖度や赤み数値化も



第4部 未来支える研究④

10月9日。藤崎町の弘前大学農学生命科学部付属生物共生教育研究センター・藤崎農場で、大学の技術職員らが県産りんご「紅玉」の選果作業を行っていた。リンゴを載せたレーンが動き、色や大きさに応じて自動で仕分けられていく。

一見、通常の選果作業と変わらないが、大きく違うのは人工智能（AI）搭載の選果機であること。国内最大手の選果機メーカー・シブヤ精機（本社・浜松市、松山市）と取り組む共同研究の一場面だ。この選果機を通過するだけで、糖度や赤み、蜜の入り具合などを数値化することができる。

研究は2024年度に始まった。収穫されたりんごは農家が大まかに仕分けた後、農協などの施設でサイズごとに選別、傷の有無などを確認した後、箱詰めされる。選果施設では自視の作業も少なくなく、一定の経験が求められる。

同社は、和歌山県産ミカ

果機は弘前市の農業生産法人で導入済み。50品種ほど

のりんごを有する弘前大学と共同研究に取り組むことで、多種多様な品種を使つたデータを取得し、仕分けの精度を向上させることも狙いの一つだという。同社

国内向けと工程を区別しな

ければならない。

二宮氏は「りんごに入っ

ている体に良い成分や鮮度

などが計測できないかにつ

いても試している。さまざま

な試験が、大学との共同

研究ではできる」と話した。

（野上圭佑）



弘前大学藤崎農場に設置されているりんごのAI選果機=10月9日



AI選果機は、糖度や成熟具合などを数値化して仕分けることができる